



同窓生が語る宮澤賢治

盛岡高等農林学校と宮澤賢治・

松田甚次郎・福井規矩三（7）

—宮澤賢治と測候所—



若尾 紀夫 (C昭39・院41)

盛岡高等農林学校農学科第2部3年の賢治は、花巻の実業家有志の団体「東海岸視察団」に参加して沿岸地方を訪れた。その目的は花巻と仙人峠間の岩手軽便鉄道の開通を記念し、東海岸地方の産業などを視察することであった。賢治は盛岡高農入学後、関豊太郎教授（地質及土壌学教室）のもとで気象学や土壌学・地質学を学び、岩手県の沿岸地域、特に宮古の測候所や浄土ヶ浜の地質に強い関心を持っていた。そのため、「東海岸視察団」に同行して釜石・大槌・山田・宮古に行き鉾ヶ崎町に上陸、宮古では浄土ヶ浜の地質を調査見学した。

岩手県には、それぞれ開設時期や目的が異なるが、宮古測候所（明治16年3月1日）、水沢臨時緯度観測所（明治32年9月22日）、盛岡測候所（大正12年9月1日）の3ヶ所が存在。賢治は農業に影響を与える気象に強い関心を持ち、それらの測候所をしばしば訪れた。測候所訪問や浄土ヶ浜の調査見学は賢治の作品創作に大きな影響を与えることになる。

宮古測候所と賢治：東海岸視察団と同行

賢治は盛岡高農3年生の時（大正6年：20歳）に、花巻の実業家有志の団体「東海岸実業視察団（以下東海岸視察団）」に加わり、釜石や宮古を訪れている。その当時、花巻と仙人峠間の岩手軽便鉄道（注1）の開通を記念して、東海岸地方の産業などの状況を視察することを目的としたものであった。

日程は大正6年7月25日から29日までの5日間、参加者は36名。岩手日報（2）に、同行記者の詳細な記事が連載されている。視察団参加者の一部は新聞記事に掲載されている。それによると賢治の母方叔父の宮澤直治など宮澤一族（宮澤右八、宮澤賢治、宮澤彌吉）の人々や、縁戚関係にある梅津善次郎（後の町長）、瀬川弥右衛門（後の貴族院議員）、笹井初之進（花巻警察署長）など花巻の実業人有名な人であり、団長は三鬼鑑太郎（岩手軽便鉄道社長・衆議院

議員）である。

三鬼団長によると「此の団体を組織しようとしたのは一昨年以來の事であつて、軽鉄の全通、共に花巻有志の頭には、一度東海岸を視察し度いと云ふ思ひがあつた。之は唯だ意想があつたと云ふ丈であるが、突然計画されて突然組織したと云ふ次第。一行は町内の上流、粒揃いである。」（2）

注1：岩手軽便鉄道は花巻から釜石を結ぶ東北線の支線として、大正4年に仙人峠まで開通した。北上山地を挟んで内陸側の岩手軽便鉄道は仙人峠が終着駅。沿岸側は鉾山の大橋駅から釜石までが釜石軽便鉄道（田中鉾山線）となる。仙人峠駅から大橋駅までの仙人峠区間は徒歩（距離約5.5km・徒歩約3時間）。昭和11年に現JR釜石線として国有化され、軌道も改軌されて花巻・釜石間が全通したのは昭和25年10月である。

東海岸視察団一行および賢治の路程（図1）

*大正6年7月25日：朝の8時34分、一行は花巻鳥谷崎停留場を出発する。遠野駅（11時55分着）、杓掛駅（午後1時2分着）を經由して仙人峠駅に到着。仙人峠を徒歩で越えて、東側の釜石軽便鉄道の陸中大橋駅（午後4時出発）から鈴子駅（午後5時半頃）を通って釜石に到着する。釜石では、一行は捕鯨会社を見学した後、五つの旅館に分宿する。

*大正6年7月26日：午前7時、三陸汽船の「日出丸」に乗り釜石を出発し、1時間40分で大槌港に到着する。上陸して1時間ほど過ぎて次の山田町に向う。更に1時間40分かかって山田港に到着し、山田町に上陸。午後1時宮古に向って出発し、午後4時10分鉾ヶ崎港（宮古湾）に入り、鉾ヶ崎町に上陸する（図2）。

釜石・大槌・山田・宮古と上陸した町々では、地元の町長・郡長・警察署長・議員・町の有力者らの大歓迎を受ける。特に鉾ヶ崎町では町の有力者（鈴木長右エ門）の別荘で手厚い接待を受ける。鉾ヶ崎



図1 「東海岸視察団」と賢治の路程 (概略図：市町は省略)

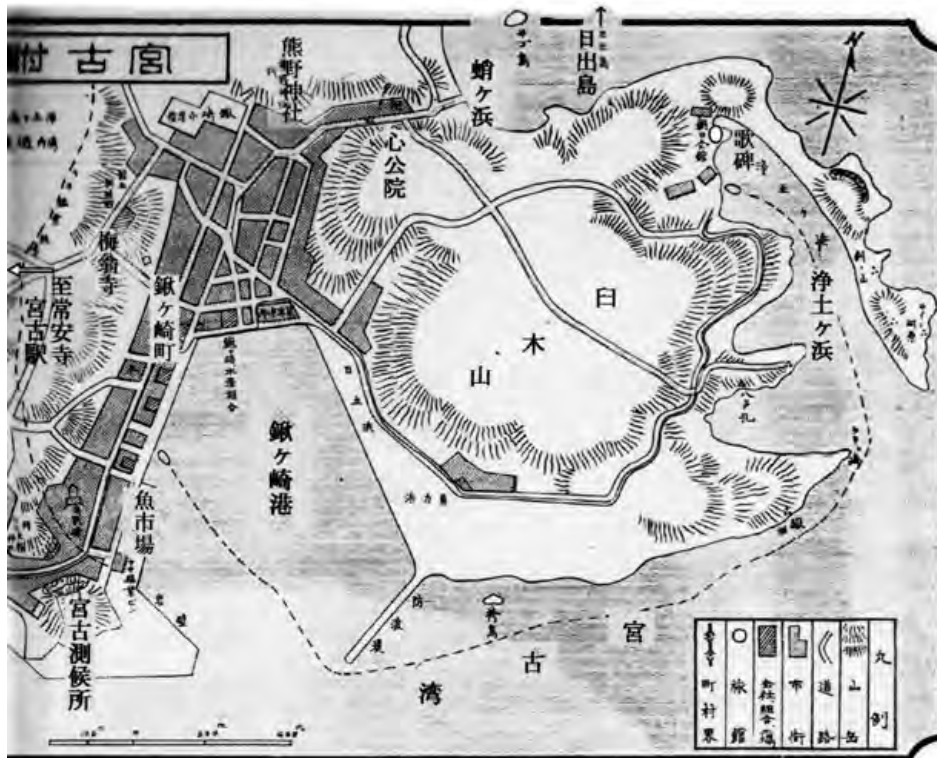


図2 宮古湾・鉾ヶ崎港・浄土ヶ浜付近の地図 (9)

町は多くの料亭や貸座敷が立ち並ぶ芸妓亭楽の巷。大正10年頃は、鉞ヶ崎花街全盛期で大勢の芸子芸者（芸妓40人・半玉12人・娼妓40人）がいたという（7）。一行は鉞ヶ崎美人の舞踊で酒の饗宴を楽しみ、午後7時頃に散会となる。

視察団一行は鉞ヶ崎町で一泊、熊安・沢田屋・山田屋の三旅館に分宿する。賢治に割り当てられたのは沢田屋旅館であったが、その旅館には泊らず知り合いの岡田与志松の家に宿泊した。岡田与志松は盛岡中学校の一年後輩で、貴重な証言（与志松92歳の時の回想）を残している（18）。

「・・・私は賢治氏とは同級ではありません。彼は私より一年上でした。私が中学三年の時、彼は中学四年で盛岡中学の寄宿舎で同室の三号室でした。彼は大正六年の夏休みのはじめ七月下旬に宮古に来て独りで沢田屋旅館に旅装を解かれました。その時の私の家は沢田屋の斜め向かいにあって、連絡をうけたので沢田屋に参上、面談の上私の家に泊って頂くことにしました。私の家での接待は長兄の妻ツヨ姉がして呉れました。その晩、どんな事をして、どんなことを話したかなどは奇妙にも少しも覚えておりません。

翌朝、私は彼を案内して佐原を通って、浄土ヶ浜に向かいました。彼は手にピックルを携えていて、足下の小石をたたいたり、荒肌をあらわしている岩を砕いたりしていました。私は別に質問するでなし、ただぼんやりとそれを見ていました。彼は道を歩きながら法華経について私に話しかけました。それにも拘らず私が無感動だったので失望した様子でした。山の一角にある墓地（注：曹洞宗・心公院）から蛸の浜を遠望し、それから（私は）何かの都合で浄土ヶ浜に出るのを止めて、急いで家に帰りましたが、その後の動静は全然記憶にありません。」

この岡田与志松の証言によって、賢治は宮古では視察団一行と別行動をとったことが分かる。賢治と岡田与志松は新町の岡田家を発って常安寺を通り佐原近くの蛸の浜（蛸ヶ浜）を望む坂の上（海拔約80m）に辿り着く。与志松はここで賢治と別れて引き返し、賢治は一人で浄土ヶ浜に向う（表・表紙写真）。

この証言で面白いのは、「ピックル」と「法華経」の単語である。賢治は盛岡高農の関豊太郎教授のもとで土壌調査や岩石鉱物収集を行った。地質及土壌学教室には、賢治も使ったであろう何本もの岩石用ハンマー（恐らく与志松はハンマーをピックルと表現したのであろう）があった（写真1）。賢治は野外に出るときはその岩石用ハンマー（18）を常に持ち歩いた。浄土ヶ浜に行くときも賢治はハンマーを携えて小石をたたいたり岩を砕いたりしたという。



写真1 岩石用ハンマー（ピックル）
関教授の地質及土壌学教室で使用していたハンマー（鉄槌：最古は明治43年購入）が残っている。

いかにも賢治らしい所作である。

当時、賢治は盛岡高農3年生で法華経信仰に帰依していたので、歩きながら与志松に法華経についていろいろと話しかけたが、与志松があまり関心を示さなかったので賢治は失望した様子であったという。

*大正6年7月27日：朝9時、視察団一行は宮古町の製糸工場・県立水産学校・缶詰製造工場・刻昆布製造場を見学し、公会堂で休憩して昼食をとり、午後2時頃に宮古測候所を訪問する。測候所の福井規矩三技師がギリシャ時代の哲学者のやうな態度で一行を迎えて案内し、晴雨器や地震計器、光がどうの熱がどうのと一々機械に就いて噛んで含めるように丁寧に説明したという（2）。

一行は宮古測候所を1時間余り見学した後、水産学校の「岩手丸」に乗船して浄土ヶ浜に上陸して見学、焼き鯛やビール・サイダーの宴があった。その後、一行は同じ舟で午後6時頃に鉞ヶ崎町に戻り旗亭長岡屋で午後11時まで過す。その間長岡屋では鉞ヶ崎美人を迎えて宴会が続いた。午後11時、賢治を除いた一行は鉞ヶ崎発の汽船「振興丸」に乗り込み、釜石に向って帰途についた。

*大正6年7月28日：視察団一行は午前3時山田港、午前7時20分大槌港に入港。午前10時過ぎに釜石に到着する。釜石鉞山の視察。田中製鉄所の見学。釜石に一泊する。

*大正6年7月29日：視察団一行は午前6時釜石を出発し、釜石軽便鉄道・岩手軽便鉄道を利用して予定通り夕刻花巻に到着する。

宮古測候所（下閉伊郡鉞ヶ崎町）と福井規矩三

宮古は江戸時代には東廻り航路の寄港地として栄え、さらに三陸漁場の中心に位置することから、宮

古で発する気象情報は三陸沖を通る船舶や漁船にとって必須であり、測候所の設置が望まれていた。明治15年9月、宮古・鉾ヶ崎両村は測候所を建設して内務省に献納することを決議し、その旨を願っていた。

それが実現して明治16年3月、内務省地理局12番目（全国12番目）の測候所として、当時「鏡岩」と云われ宮古湾を一望できる出崎埠頭裏手の岩山（標高29m・旧砲台場）に建てられ、明治16年3月1日に開所・気象観測を開始した。これが岩手県の気象観測の始まりである。当初の測候所は小屋のような粗末な建物であったが、明治35年、県移管後に洋風八角形木造二階建に新築された（写真2）（9）。頂上には風向を知る機械や日没日出を知る機械などがあった。昭和30年に解体するまでの長い間、測候所は港町宮古のシンボルとして親しまれていた。その後、昭和11年、建物の老朽化により取り壊され、測候所も鉾ヶ崎館山へと移転した。

宮古湾頭の高台に建つ八角形木造二階建ての宮古測候所。遠くからでも目立つ白いエキゾチックな測候所。賢治は宮古湾に入る船上から、この美しい建物を眺めたことであろう。

福井規矩三（明治3年～昭和25年）は宮古測候所の技師として在籍。第9代の宮古測候所長（大正2年11月15日発令）となる。大正11年7月18日には宮古測候所長兼盛岡測候所長、大正11年12月15日に盛岡測候所長兼宮古測候所長となる（10）。その後、宮古測候所長兼業が解除され大正12年9月1日に盛岡測候所初代所長となり、昭和9年5月18日に退職（依願免官：64歳）する。

賢治は東海岸視察団になぜ参加したのか。

「東海岸視察団」に参加したときは、賢治は盛岡高農農学科第2部の3年生であった。盛岡高農農学科第1部・2部3年生は、大正6年7月21日から8月4日までの14日間、北海道方面に見学旅行（松井讓吉教授統導）したが、賢治は「東海岸視察団」（大正6年7月25～29日）の方に参加した。賢治はなぜ盛岡高農の学友達との北海道見学旅行をキャンセルし東海岸視察を選んだのか。詳細は不明であるが、色々の理由が考えられる。

視察団の目的は「岩手軽便鉄道の全通を機に、一度東海岸を視察すること」であったというが、賢治自身も同様に「岩手軽便鉄道に乗って東海岸を見たい」との強い思いがあったのではないかと。また賢治は盛岡高農に入学後、関豊太郎教授（地質及土壌学教室）のもとで気象学や土壌学・地質学を学び鉱物や岩石に興味を持っていたので、岩手県の沿岸



写真2 宮古測候所
宮古湾を一望できる出崎埠頭裏手の岩山（標高29m・旧砲台場）に位置する（図2）。

地域、特に宮古浄土ヶ浜の地質や宮古測候所に強い関心を持っていたのではないかと。

「東海岸視察団」の実態は「オジサンたちの観光ツアー」とは言い過ぎだろうか。岩手軽便鉄道に乗り花巻を発車すると、早速葡萄酒の栓を抜き門出祝いが始まる。料亭では芸者をあげて宴会をする。当時としては特段に珍しい光景ではない。賢治は酒も飲まず宴会の席も嫌いな堅物とみられていた。賢治はまったくの下戸ではないが酒宴を好まず敢て飲まなかったという（20, 22）。オジサンたち一行にとけ込めない浮いた存在。そのような状況を想像すると、旅行中皮肉の一首を詠みたくなる賢治の心情がわかる。

賢治の短歌：

「たよりなく蕩児の群にまじりつゝ七月末を宮古に来る（557）」

「ひとびとは釜石山田いまはまた宮古と酒の旅をつゞけぬ（558）」

ところで賢治（大正9年8月26日）は、関豊太郎教授の稗貫郡土性調査に参加し大迫町の石川旅館に宿泊した。その夜は関教授を主賓として郡技手・町長・村長らが集まって慰労会が催された。その宴会のようすを賢治は、文語詩「夜をま青き藺むしろに」の「土性調査慰労宴」（14）に残している。

.....

酔ひて博士のむづかしく
大学出なる町長も
たゞさりげなくあしらへば
接待役の郡技手も
眉をひそめてうち案じ

.....

酒得て吞まず酔はざらば
西瓜を喰めとす、むるは
組合村の長なれや

.....

酒の席で、酒豪関教授が酔っぱらい難しいことを言うので郡技手や町長たちが扱いに困っているようです。そのような酒席で賢治は酒を飲まないの、村長は賢治にスイカを食べるとすすめるようすを詠ったものである。

岩手日報（大正10年3月6日）の記事に「酒も飲まず煙草は喫かさず女の話一つも無いと云ふ石部金吉派に属する人間だと高農在学中当時から同級生間の変人として取扱はれてゐた。」とある。このように酒席を好まない賢治が酒席を予想される「東海岸使節団」に加わったのは、それなりの意図があったのである。

宮古上陸後は東海岸視察団と別行動を取る

大正6年7月26日の午後4時10分銚ヶ崎港に入り、銚ヶ崎町に上陸する。賢治は割り当てられた沢田屋旅館には泊らず、盛岡中学校の1年後輩で寄宿舎で同室だった岡田与志松の実家に宿泊する。与志松によると、賢治から突然連絡があったので沢田屋旅館に行き事情を伺い、自宅に泊ってもらうことになったという（18, 26）。やっとオジサンたちから解放されたのだ。宮古では賢治は最初から単独行動する積りで参加したのであろう。

翌7月27日朝、賢治はハンマーを持って、与志松と一緒に岡田家を発って常安寺を通り蛸の浜を望む坂の上に辿り着く。ところが与志松は、何故か理由が分からないが、ここで賢治と別れて引き返す。与志松の都合というよりは、推察するに賢治の方からここで別れようと言い出したのではないか。賢治は一人で心公院を通り浄土ヶ浜に到着する。他方視察団一行は、水産学校の「岩手丸」で浄土ヶ浜に上陸して見学、しばらく滞在して同じ船で宮古に引き返した。

浄土ヶ浜は、新生代古第三紀、今から約五千二百万年前に固まったマグマからできた白色火山岩（流紋岩）（注1）で、周辺には中生代白亜紀（約一億一千万年前）に海に堆積した地層（黒褐色堆積岩：宮古層群）（注2）（裏・表紙写真）が入り組んでいる。中生代は恐竜の全盛期で、中生代白亜紀に形成された地層に恐竜の化石が含まれている。蛸の浜や近くの日出島海岸は宮古層群で、前期白亜紀（約一億一千万年前）の地層で、多くの化石が豊産するこ

とで知られている。浄土ヶ浜の見学と大規模に露出する流紋岩や宮古層群の観察など賢治の実体験は、「檜の木大学士の野宿」「檜の木大学士の第3夜」の素材になっているという（27）。

注1：流紋岩（rhyolite）はマグマが冷えて固まってできた火成岩で、色は白色のものが多い。流紋岩の名称は流れ模様（流理構造）が見られることにより、流理構造の見られないものを「石英粗面岩（liparite）」と呼んでいたが、現在では流紋岩に統一されている。

注2：宮古層群は田野畑村から宮古市にかけて太平洋沿岸に分布する前期白亜紀（約一億一千万年前）の黒褐色堆積岩で、アンモナイト・有孔虫・サンゴ・貝類・ウミユリ・甲殻類・魚類などの化石が豊産する（7）。

賢治は27日の朝、父親に葉書〔書簡34〕（16）を投函している。

拜啓 昨夕（注：26日夕方）当地着仕り候 小生
本日（27日）午后又は明日（28日）より小国を経て三十日夜迄に帰り申す予定に御座候 一日遅れ候も充分の視察致したく存じ居り候 一同元氣先づは 草々

この朝父親に宛てた手紙で、この日午後または翌日に小国へ向かい、場合によっては一日延ばして30日夜までには花巻に帰る予定であると知らせた。この手紙から賢治は宮古での調査に強い興味があることがわかる。実際は予定通り翌28日に宮古を離れ小国経由で29日に帰花している。

浄土ヶ浜に立った賢治は、その景観や岩石を観察、恐らく隣接の蛸の浜にも立寄ったであろう。緑の松が生い茂る白亜の岩礁と白い小石浜。賢治は初めて見る浄土ヶ浜の美しい景色に感動したことであろう。賢治が浄土ヶ浜を詠んだいくつかの短歌がある。

- *うるはしき海のびらうど褐昆布寂光ヶ浜に敷かれ光りぬ（560）
- *寂光のあしたの海の岩しろくころもをぬげばわが身も浄し（561）
- *雲よどむ白き岩礁砂の原はるかに敷ける褐の海藻（562）
- *寂光の浜のましろき巖にしてひとりひとでを見つめゐるひと（563）
- *基督のさましてひとり岩礁に赤きひとでを見つめゐるひる
- *展べられし昆布の中に大なる釜らしきもの月にひかれり（564）
- *うるはしの海のびらうど昆布らは寂光のはまに

敷かれひかりぬ [書簡35]

保阪嘉内あて [書簡35] (16) では、浄土ヶ浜で昆布などを干している光景を詠っている(歌碑：表・表紙挿入写真)。「漁師が海から採ったビロード色の昆布やワカメなどの海藻が寂光の浜に敷かれ美しくひかっている」という意味であろう。賢治は、昆布・びろうど・褐昆布・褐の海藻・寂光・寂光ヶ浜・寂光のはま・白き岩礁・ましき巖など、色々の言葉で浄土ヶ浜の情景を詠んでいる。

短歌(564)では「昆布を煮る大きな釜らしきものがあり、それが月にひかっている」と詠っている。恐らくその日(27日)の晩は、沢田屋旅館でもなく岡田家でもなく、月明かりの下で浄土ヶ浜付近に野宿して過したのであろうか。

賢治は浄土ヶ浜という言葉を使わず、「浄土ヶ浜」を「寂光の浜」と言い替えている。当時(盛岡高農3年)の賢治は法華経に帰依していたので、宮澤家の宗派である「浄土」真宗を意識してあえて「寂光」(注1)(32)と読み替えたと思われる。

注1：(常寂光土・寂光土・寂光浄土)：宇宙の究極的真理としての仏陀が住する浄土で、永遠で煩惱もなく、絶対の智慧の光に満ちているという。

「寂光」は真理の静寂と真智の光。「浄土」は汚れがなく清らかな世界。

東海岸視察団に参加して銚ヶ崎や浄土ヶ浜などを訪れた時から8年後、大正14年1月5日から9日まで、賢治は三陸地方へ旅行をした(花巻→盛岡→八戸→種市→羅賀→宮古→山田→大槌→釜石→花巻)。真冬の凍てつく三陸の海を旅する賢治の真意はわからないが、賢治は羅賀港から発動機船に乗船し宮古へ向かった。真夜に銚ヶ崎港に入港する時の情景は「発動機船 三」に描かれている(13)。宮古の低い丘や山々、星空や寒風、町の明滅する灯、宮古測候所の信号燈、重茂半島の本州最東端の岬にある白亜の鮎ヶ崎灯台など、賢治は恐らく視察団と一緒に来た昔を懐かしく思い出したことであろう。

発動機船 三

石油の青いけむりとながれる火花のしたで
つめたくなめらかな月あかりの水をのぞみ
ちかづく港の灯の明滅を見まもりながら
みんなわくわくふるえてゐる

……水面にあがる冬のかげらふ……

も、引ばきの船長も

いまは鉛のラッパを吹かず

青じろい章魚をいっぱい盛った

樽の間につっ立って

やっぱりがたがたふるえてゐる

うしろになったトドの崎の燈台と

左にめぐる山山を

や、口まげてすがめにながめ

やっぱりがたがたふるえてゐる

……ぼんやりけぶる十字航燈……

あ、冴えわたる星座や水や

また寒冷な陸風や

もう測候所の信号燈や

町のうしろの低い丘丘も見えてきた

羅賀で乗ったその外套を遁がすなよ

賢治は宮古測候所を訪れたのか。

[仮説A]：視察団と測候所に行った。

27日の朝、賢治は浄土ヶ浜に立ち、白亜の岩礁や磯など他では見られない特徴的な景色に感銘を受け、しばしそこにたずみ観察したであろう。鮎の浜あるいは日出島海岸にも足を延ばしたかも知れない。午後2時頃、宮古に戻り視察団一行に加わり宮古測候所を見学した。そこで、福井規矩三技師の説明を聞き、彼と面識を得たのではないか。測候所見学の後、賢治は一人で浄土ヶ浜に戻り、そこで野宿して一夜を過した。

[仮説B]：一人で測候所を訪ねた。

浄土ヶ浜などを見学後に視察団には加わらず一人で測候所を訪ねた。

[仮説C]：測候所に行かなかった。

仮説Aと同様に、27日の朝、賢治は浄土ヶ浜に行き、白亜の岩礁や磯などを観察し、鮎の浜あるいは日出島海岸にも足を延ばした。現場調査が長引いたため宮古測候所に行く時間がなかった。

同行の新聞記者は賢治について全く触れていない。賢治の名前は第1報(2)の参加者名簿に記載があるのみで、記者は個人的なことに関心がないのか、記事には賢治の行動は出ていない。

賢治は気象に強い関心をもっていたので、東海岸視察団に参加した目的として宮古測候所の見学が考えられる。残念ながら確定する証拠はないが、「宮古測候所に行った」と考えるのが妥当ではないか(仮説Aないし仮説B)。

賢治は宮古から徒歩で花巻に帰る

視察団一行は、27日の夜に汽船「振興丸」に乗り込み宮古を出航、28日釜石に入港。釜石で一泊し、翌29日に釜石軽便鉄道・岩手軽便鉄道を利用して夕

刻花巻に到着、5日間の視察旅行を終了する。

ところが賢治は内陸部を歩いて帰路に着く。何故わざわざ困難な徒歩を選んだのか。帰りの経路の根拠は多くないが、幾つかの証拠から推察される（図1）（7,8）。

宮古街道と盛宮自動車

宮古街道（閉伊街道：現国道106号線）は岩手県北における唯一の海岸部と内陸部を結ぶ道路であり、明治33年に開通し馬車による運行が可能になった。当初は、盛宮間は馬車で3日を要したが、明治39年に開業した盛宮乗合馬車は1日1往復、所要時間12時間ほどであった。

大正2年には盛宮自動車により岩手県内初となる路線バスの運行が開始された。

所要時間短縮のためイタリアからバスを購入し、大正元年に県内初となるバス事業者・盛宮自動車となった。盛宮間を1日1往復、所要時間6時間で結んだ。山田線は昭和9年に全通し、盛岡と宮古が鉄道で結ばれる。

宮古街道は悪路のためしばしば事故が起り、大正3年7月24日には門馬村（現宮古市門馬）で乗合バスが崖から転倒し、乗り合わせた新渡戸稲造博士（23日に宮古地方で視察と講演）他、乗客10名が重軽傷となる惨事があった（1,6,7）。

賢治の帰花ルート

賢治は28日に、浄土ヶ浜から徒歩で帰路に着いた。その路程は宮古→茂市→腹帯→陸中川井→江繋→小国→立丸峠（小国峠）→土淵→遠野であろう（図1）（25,26,31）。

当時、既に盛宮自動車が開通していたので、賢治は宮古駅からバスに乗り宮古街道の小国口（川井と上川井の間）で降りたのではないか。直接バスで盛岡まで行き、そこから花巻に戻る帰路もあったが、何故か内陸ルートを選択した。

宮古街道からは小国街道（遠野街道：現国道340号）に入る。小国街道は北上山地内の上閉伊郡遠野町（現遠野市）と三陸海岸の下閉伊郡川井村（現宮古市）を結ぶ役目を担ってきた。小国街道の途中には小国峠（立丸峠）があり難所として知られていた（注1）。賢治は、道すがら宮古で手に入れた蛸の足を噛みながら歩き続け、夕方遅くに小国峠麓に辿り着き、歩き疲れたのでその日は小国村の宿に一泊した。

賢治の短歌：

「山峡の青きひかりのそが中を章魚の足など喰み行けるひと（567）」

「夕づつもあはあはひかりそめにけりあした越ゆべき峠のほとり（568）」

翌29日のあけがた遠野に向けて歩み出すとき、峠に霧がかかり近くにある青いトマトの匂いが漂ってきたという。

「あかつきの峠の霧にほそぼそと青きトマトのにはほひながる（570）」

注1：小国街道（遠野街道）は古来地域の交通の要所として利用され、峠道は山間部を越える重要なルートであり、特に江戸時代には商人や旅人が頻繁に利用したと云われる。

朝方宿を発った賢治は、途中未角橋脇にある赤いポストに保阪嘉内あての手紙を投函した（25）。

保阪嘉内あて葉書〔書簡35〕7月29日（陸中国小国峠麓ニテ）

- *釜石の夜のそら高み熾熱の鋳炉にふるふ鉄液のうた。
- *この群（東海岸実業視察団）と釜石山田いまはまた宮古と酒の旅をつゞけぬ。
- *やうやくに湾に入りたる蕩児らの群には暮れの水の明滅。（宮古湾）
- *蕩児らと宮古にきたり夜のそらのいとゞふかみに友をおもへり。（ここにて群れをはなる）
- *うるはしの海のピロード昆布らは寂光のはまに敷かれひかりぬ。（浄土ヶ浜）
- *青山の肩をすべりて夕草の谷にそゞげる青き日光。

盛岡高農の生徒（3年生）で生真面目な賢治は、酒ばかり吞んで遊興しているオジサンたち視察団一行とは馴染めなかった。賢治が釜石から宮古までの旅行中に詠った短歌からその様子が読み取れる。

釜石では鋳山溶鋳炉のまっ赤に溶けた熾熱の鉄液を詠う。東海岸視察団一行を蕩児らと呼び、釜石・大槌・山田・宮古と酒の旅を続け、宮古では蕩児らと別れ、友（保阪嘉内）のことを思い浮かべた。浄土ヶ浜の白い小石浜に敷かれたピロード昆布がひかっている様子、浄土ヶ浜からの帰り道、樹木が鬱蒼と茂り青色の光が洩れる坂道をくだってゆく様子を詠んでいる。

賢治は小国街道の山谷を遠野に向って歩き続けた。真夏の暑い日であった。濃い朝霧も次第にうすれ、その霧のなかに黒紫色の実が見られるが、あれは毒うつぎの実か。また細長いたけにぐさ（竹似草）が群生している原っぱを越えて行くと、木々の間から鳥のさえずりが聞こえてきた。

「青山の融け残りたる霧かげにくらく熟れたる毒
うつぎあり (571)

「たけにぐさむらだつ原を越えくれば木々の後光
に鳥しば啼けり (572)」

小国と遠野は約10里。やっと遠野の町にやって来た。遠野の町に入ると、「八千代の看板」(注1)や「切り抜き紳士」(注2)が目につき短歌三首を詠んでいる。

「そらひかり八千代の看板切り抜きの紳士は棒に
ささへられ立つ (573)」

「そらひかる遠野の町に切り抜きの紳士は高くかゝ
げられたつ」

「あをじろきひかりのそらにうかびたつ切り抜き
紳士二きれの雲 (574)」

注1：八千代の煙草のパッケージが描かれた看板。

八千代は、大正4年に大正天皇即位の大礼を記念して発売された煙草で、そのパッケージには雅楽の大太鼓に幔幕・濃い緑の松が描かれている。八千代はわが国の記念タバコ第1号。八千代のパッケージと大きく菊花が描かれ雅やかなポスターも制作された。

注2：板を切り抜いた紳士の看板で、店の前に倒れないように工夫して飾ってあったのであろう。

小国から歩き疲れ果てた賢治は、遠野からは岩手軽便鉄道に乗り予定通り29日の夕方には花巻に戻った。8月に入ると保阪嘉内に手紙を書き、東海岸の旅行に行ってきたことを知らせ、また嘉内からは北海道旅行で体験したことを伺いたいと結んでいる。

高橋秀松あて葉書〔書簡36〕(16) 8月15日(花巻帰省中)

御旅行(注1)中は度々御便りを戴きまして誠に有り難う存じます。御元気で御帰りになり先づは御めでたうございます。只今は農場に実習で随



写真3 水沢緯度観測所本館(現奥州宇宙遊学館)

分御勞れでせう。私の方は御陰でまめしくて居ります。先月の末四五日の間東海岸を見て参りました。あなたの方にも沢山面白い話があるでせうが孰れゆっくりうかゞいませう。

注1：盛岡高等農林学校農学科第1部・2部3年生の北海道方面見学旅行を示す。賢治はこの旅行には参加しなかった。

水沢緯度観測所と賢治

水沢緯度観測所

水沢緯度観測所または水沢天文台(現在は国立天文台水沢VLBI観測所)(注1)は、明治32年9月22日に臨時緯度観測所として設置され、同年12月11日(創立記念日)に緯度変化観測が開始された。同年12月30日には技師木村 栄博士が臨時緯度観測所長として赴任。大正9年10月には緯度観測所となる。

大正10年に、初代の臨時緯度観測所庁舎(現木村栄記念館)に代り2代目の緯度観測所本館が建てられた。木造2階建ての洋風建築で屋根中央の塔屋を中心に左右対称の様式である(写真3)。2代目の緯度観測所本館は昭和42年まで使われていたが、現在は奥州宇宙遊学館として一般に開放されている。

注1：超長基線電波干渉法(VLBI: Very Long Baseline Interferometry)

五輪峠を越えて：詩「晴天恣意」

当時岩手の沿岸部には宮古測候所(明治16年設立)があったが、内陸部には測候所がなく(盛岡測候所は大正12年に設立)、水沢緯度観測所では明治32年から気象観測も行い天気予報を出し、地域の人にも気象データを見ることができた。賢治は気象や宇宙にも関心があり水沢緯度観測所をしばしば訪れている。

大正13年3月24日、賢治は花巻から雪の降る五輪峠を歩いて越え、人首町で一泊し、翌25日に水沢にある緯度観測所を訪問。その間に賢治は「五輪峠」との題名がついた詩群を残している(五輪峠 詩群：『春と修羅 第二集』)。詩5編のうち、五輪峠16を除いた4編には定稿(本文形)と異稿(先駆形)があり、五輪峠16には定稿と先駆形A・先駆形Bがある(12)。

14〔湧水(みづ)を吞まうとして〕(1924. 3. 24)、16 五輪峠(1924. 3. 24)、17 丘陵地を過ぎる(1924. 3. 24)、18 人首町(1924. 3. 25)、19 晴天恣意(1924. 3. 25)

3月末、五輪峠では雪がどしどし降っていた。五輪峠を越えて人首町で一泊した賢治は、25日に水沢

に向った。水沢の緯度観測所に着いた賢治は、建物内部を見て回り様々な観測器機（天頂儀や雲量計など）を見学、また気象観測データに目を通した。その時の様子を詠った詩が「晴天恣意」である。

賢治はなんの目的で緯度観測所に来たのか。大正12年は早魃で大凶作であった。賢治は大正13年も農作物が凶作になるのではないかと心配し、この年の気象状況を予測するために緯度観測所を訪ねたのであろう。

つめたくうららかな蒼穹のはて
種山ヶ原の右肩のあたりに
白く大きな仏頂体が立ちますと
数字につかれたわたくしの眼は
……

そんなにもうるほひかゞやく
碧瑠璃の天でありますので
いまやわたくしのまなこも冴え
ふたゝび陰気な扉を排して
あのくしゃくしゃの数字の前に
かゞみ込もうとするのです

賢治は緯度観測所の陰気な部屋の扉をあけて中に入ると、そこにある沢山の気象記録帳に書き込まれた「くしゃくしゃな数字」を一心不乱に読みとるが、その作業に疲れた「まなこ」は、碧瑠璃の天をみて冴えてきたという。

詩「測候所」

賢治は大正13年4月6日に再び水沢緯度観測所を訪れ、詩「三五 測候所」を詠んでいる（12）。前回の訪問（大正13年3月25日）から12日後である。

シャーマン山の右肩が
にはかに雪で被はれました
うしろの方の高原も
をかきな雲がいっぱい
なんだか非常に荒れて居ます
……凶作がたうたう来たな……
杉の木がみんな茶いろにかはってしまひ
わたりの鳥はもう幾むれも落ちました
……炭酸表（注1）をもってこい……
いま雷が第六圏（注2）で鳴って居ります
公園はいま
町民たちでいっぱいです

シャーマン山の右肩がにわかに雪におおわれ、後ろのほうの高原の雲ゆきが怪しくなり大分天気荒れてきた。心配していた凶作がとうとうやって来た。

杉の木の葉っぱも茶色になり枯れ渡り鳥も落ちたりして、死の様相を呈している。雷がとどろき、公園には不安を抱えた町民たちがいっぱい集っている。

注1：炭酸ガスは地球の気温や気候に影響を与え、温暖化の要因の一つであることは科学的に証明されている。炭酸表とは炭酸ガスの状況の変化を記録した表のことか。「測候所 先駆形 三五 凶歳」（20）には、「海温表を持ってこい」とある。

注2：「第六圏」は下書稿では「第六天」とされている。「いま雷が第六天で鳴って居ります」（12）。

賢治はなぜ水沢緯度観測所に再び行ったのか。この作品で「……凶作がたうたう来たな……」と書いている。賢治はこの年の早害凶作を心配して気象データの再調査に行ったのであろう。そのため前回の緯度観測所訪問から僅か12日後に、再度水沢まで出向いた。賢治は緯度観測所本館の2階に登りこの詩を詠んだのであろう。シャーマン山とは早池峰山であり公園とは水沢公園であろう。天候の悪化する兆しが見え、賢治や公園に集っている町民は今年も凶作の年になることを案じている。

筆者は、昨年5月、水沢に行き奥州宇宙遊学館（旧緯度観測所本館）の2階から望遠したが早池峰山の姿は見えなかった。当時、賢治は緯度観測所の2階から早池峰山を見たのだろうか。

水沢緯度観測所と賢治作品

賢治はたびたび水沢緯度観測所を訪れており、賢治の作品には水沢緯度観測所または水沢天文台が登場する。

賢治は、童話『風野又三郎』（『風の又三郎』の初期形）（17）の中で、主人公が臨時緯度観測所に来て建物の上で休みながら下を眺めている場面を描いている。「そうだ、そのとき僕は海をぐんぐんわたってこっちへ来たけれども来る途中でだんだんかけるのをやめて、それから丁度5日目にここも通ったよ。その前はあの水沢の臨時緯度観測所も通った。あすこは僕たちは日本では東京の次に通りたがるところなんだよ。なぜって、あすこを通るとレコードでもなんでも外国の方まで知れることがあるからなんだ。」

作品には梅雨入りのテニスコートの様子が描かれている。

「大丈夫です、すっかり乾きましたから。」と云う声がするんだらう。見ると木村博士と気象の方の技手とがラケットをさげて出て来てみたんだ。木村博士は瘠せて眼のキョロキョロした人だけれども僕は

まあ好きだねえ、それに非常にテニスがうまいんだよ。僕はしばらく見てたねえ、どうしてもその技手の人はかなわない、まるっきり汗だらけになってよろよろしてゐるんだ。あんまり僕も気の毒になったから屋根の上からじっとボールの往来をにらめてすきを見て置いてねえ、丁度博士がサーブをつかったときふうっと飛び出して行って球を横の方へ外らしてしまったんだ。博士はすぐもう一つの球を打ちこんだねえ。そいつは僕は途中で居て途方もなく遠くへけとばしてやった。」

このように「水沢の臨時緯度観測所」や「Z項」(注1)を発見した天文学の世界的権威でありテニス大好きな木村 栄博士が、『風野又三郎』に実名で登場する。賢治は木村博士の特徴やテニス好きのことをよく観察して作品に登場させている。

人の中にある嫉妬心と虚栄心などへの葛藤を描いた『土神ときつね』(15)では、狐と樺の木の話で、狐がいばって「それは立派ですよ。僕(環状星雲・

魚口星雲を)水沢の天文台で見ましたがね。」と言ったりする。

注1：Z項とは、水沢緯度観測所初代所長の木村 栄博士により、地球の極運動「形状軸(南北軸)の周囲を移動する運動」に関する式に加えられた項のことで、表現に記号Zを使うことからZ項という。

盛岡測候所と賢治

盛岡測候所の開所

大正11年5月4日、測候所設立の許可(文部省)がおり同年7月1日庁舎起工。大正12年9月1日、盛岡測候所(岩手県営)として創設業務を開始したが、9月1日に関東大震災があったため、落成式は同年9月8日に延期開催された。場所は盛岡市内の小高い丘、新庄山王(海拔155.2m:因みに盛岡市役所の海拔126m)で、本屋は総鉄筋コンクリート3階建(写真4・5・6)。盛岡測候所は『グスコブドリの伝記』のイーハトーブ火山局のモデルといわれる。



写真4 盛岡測候所と岩手山の遠景



写真5 盛岡測候所本館(8)



写真6 盛岡測候所創立記念メダル

測候所の業務は毎時観測で1日24回のデータを統計して気象予報することであり、気象観測を開始した測候所では、市民に天気予報サービスを行った。測候所は昭和11年10月1日付で県から国に移管、中央气象台盛岡支台となり、昭和32年9月1日付で盛岡地方气象台に昇格した(19)。

福井規矩三所長と賢治

賢治は大正10年12月3日、稗貫郡立稗貫農学校(大正12年4月1日に県立花巻農学校)の教師となり、大正15年3月31日に花巻農学校を依願退職した。同年4月1日に羅須地人協会を設立したが、昭和2年8月10日頃に健康を害し下根子桜から豊沢町の実家に戻り療養生活に入り、羅須地人協会から撤退す



写真7 盛岡測候所長 福井規矩三
(大正12年9月1日—昭和9年5月18日)

ることになる。

花巻農学校の教師をしていた賢治は、大正13年4月6日に水沢緯度観測所を訪れ、詩「測候所」を詠んでいる(12)。水沢緯度観測所や盛岡測候所を度々訪問したことは、賢治の作品創作の構想を育んだといわれる。

盛岡測候所(大正12年9月1日)が新築開所(写真4・5)し、既の実績のある宮古測候所技師である福井規矩三が初代所長(写真7)として就任した。その間の経緯については前記した。

賢治は大正13年7月末頃から盛岡測候所に姿をみせるようになり、それ以降は、賢治は生徒たちを連れて測候所に通い気象データを調べ福井規矩三所長に教をを請うようになった。

賢治は昭和2年7月18日に福井規矩三所長を訪問し、気象記録を調べて帰り、翌7月19日、前日に調べたこの年の気候の見通しにもとづいて、この日は必要な手だてを打ち、測候所の福井規矩三所長にあて礼状を書いている[書簡231](写真8・9)。

昨日はご多用のところいろいろとご教示を賜はりまして寒に辱けなく存じます。お蔭様で本日は諸方に手配を定め茲兩三日中には充分安全な処理を了へるかと思われまふ。先づは度んでお禮申しあげます。

昭和二年七月十九日 宮沢賢治
福井規矩三先生

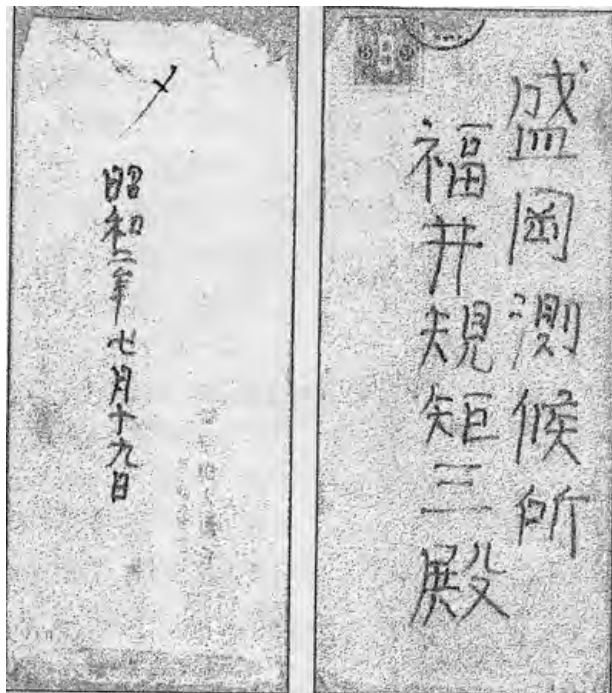


写真8 賢治から福井規矩三所長あて手紙(封書)

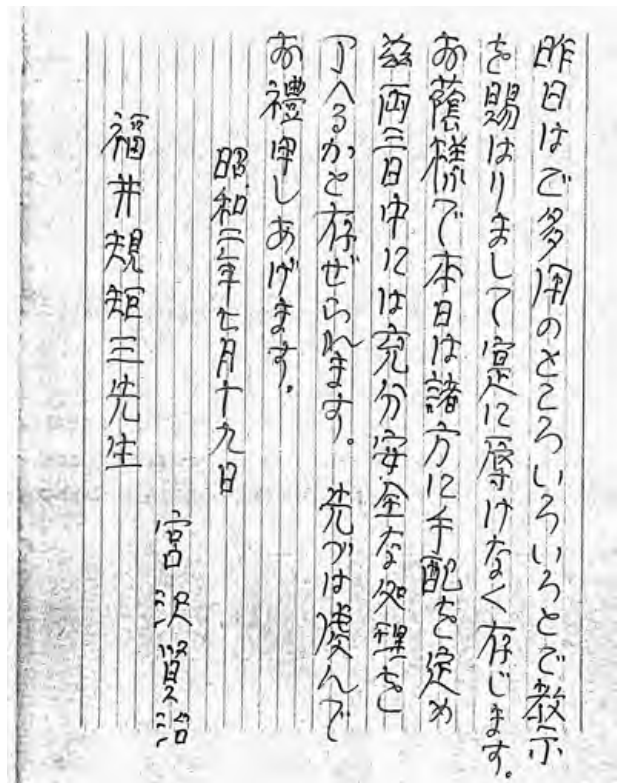


写真9 賢治から福井規矩三所長あて手紙(書面)

福井規矩三の記録「測候所と宮澤君」

福井規矩三から聞き書きした文章「測候所と宮澤君」には、その頃の状況について以下のように記されている。口述筆記者は賢治の親友森 惣一（注：森 莊己池）で、昭和14年1月2日に盛岡市山岸の福井規矩三宅で面会。当時70歳（5）。

「大正十三年は岩手県はひどい旱害であったが、その年の七月の末頃、あの君にはじめてお目にかかった。土用の入りの日じやつたが、別に紹介状もなしにやつて来られた。服装は背広で、それから屢々お目にかかったが、いつも洋服であつたやうに思ふ。ごく質素な方で、身の廻りのことなどは頭になかつたお方と思ふ。そのときも帰つてからいていねいなお手紙をくださったが、なくしてしまつた。大正十三年の旱天は、岩手県では近ごろではなかつた旱害の記録で、以前は何時でも水が余つてゐたので、水不足で作付けが出来ないといふことはなかつた。大正七年にもちよとした小規模な旱天があつたが、大正十三年のは、とてもきつかつた。雨が不足で一般に植え付けが困難であつたが、ことに胆沢郡永岡付近が水廻りが悪かつた。花巻方面はさほどでもなかつたが、後も雨が不足で作物が困難になつて来てをつた。昔から岩手県では旱魃に凶作なしといふて、多雨冷温の時は凶作が多いが、旱天には凶作がない。あの君としては、水不足が気象の方から、どういふ変化を示すものであるといふことを専門家から聴き、盛岡測候所の記録を調べて、どういふ対策を樹てたらよいかといふことに頭を悩まされたことと思ふ。七月の末の雨の降り様について、いままでの降雨量や年々の雨の降った日取りなどを聴き、調べて帰られた。昭和二年はまた非常に寒い気候が続いて、ひどい凶作であつた。そのときもあの君はやつて来られていろいろと話した調べて帰られた。（以下略）(23)」

花巻農学校で勤務していた賢治は、大正13年7月末頃から盛岡測候所に姿をはじめみせるようになり、その後も度々訪問した。それは賢治が旱害を心配して、水不足と気象の関係について専門家の意見を聞いたり降雨量や気候などの記録を調べてどのような対策を立てたらよいか思案していたためであろう。

ところで記述の中に「大正十三年は岩手県はひどい旱害であつた」・「大正十三年の旱天は、岩手県では近ごろではなかつた」・「大正十三年のは、とてもきつかつた。」・「昭和二年はまた非常に寒い気候が続いて、ひどい凶作であつた。そのときもあの君はやつて来られていろいろと話した調べて帰られた。」とある。

大正に入ってから気候について俯瞰すると、大

正2年は日本で気象観測が始まって以来の大冷害であり、その後、昭和6年の大冷害までの18年間は、むしろ旱魃の気候で冷害らしきものはなく気温の面では安定していた(21)。

大正12年はヒデリが続き最凶作の年となる。大正13年及び大正14年もヒデリの年であつた。大正15年には紫波郡や稗貫郡では大正12年と同等の大凶作になり、地元新聞紙上で稗貫郡一帯の旱害「ヒデリによる凶作」の様子が連日報道された(28, 29)。

昭和2年にも紫波郡一帯は大旱魃の状態であつた。この年は「多雨冷温の天候不順の冷夏で、未曾有の冷害凶作であつた。」との多くの記述がみられるが、その根拠が見当たらない。この年はむしろ旱魃であつた(28, 29)。

福井規矩三は「大正十三年は岩手県はひどい旱害」「昭和二年はまた非常に寒い気候が続いて、ひどい凶作であつた。」と述べているが、「大正十三年は大正十二年」、「昭和二年はヒデリによる凶作」の間違いであり、福井規矩三の事実誤認であるという(28)。

詩集「春と修羅」と福井規矩三

「大正十四年の或日おいでになつたときに、『春と修羅』に名刺を入れて、測候所からの帰り道こそつと家へ置いて行つた。ただ置いていつただけで、その後一ぺんも、あの本についてはいひもしなかつたし、ききもしなかつた。その後何べんかトウシャ版の雑誌を送つて来られた。羅須地人といふので、肥料のことから芝居のこと音楽のことまであつた。」(5, 23)

「宮澤さんは、測候所だけではなく、家（注：盛岡市山岸の自宅）にもおいでになつたことがあります。宮澤さんから頂戴した詩集『春と修羅』を父は大事にしていました（長女の証言）。」(24)

大正14年のある日、賢治は測候所からの帰り道、福井規矩三所長宅に立寄つて詩集『春と修羅（大正13年4月20日発行）』（写真10・11）を置いていった。福井規矩三所長はその詩集『春と修羅』を大事にしていたという。この『春と修羅』はご令孫の福井規矩男氏が大切に保管している。

宮澤賢治と松田甚次郎と福井規矩三

宮澤賢治と松田甚次郎

山形県新庄生まれである松田甚次郎（以下甚次郎）は、大正15年4月に盛岡高等農林学校農学別科に入学し盛岡で1年を過した。農学別科入学が賢治との出会いのきっかけとなり、甚次郎の生涯を決定付け



写真10 賢治が福井規矩三所長に贈呈した詩集『春と修羅』表紙



写真11 『春と修羅』の奥付

た。甚次郎は、農学別科卒業（昭和2年3月）を間近に賢治を花巻を訪ねた。賢治が花巻農学校を依願退職して羅須地人協会を設立した頃であり、早魃大凶作（大正15年～昭和2年）の時期であった。甚次郎は早魃早害に関心を抱き心痛めた。

昭和2年3月8日の午後、恩師宮澤賢治先生を訪問した時に、先生は「君たちはどんな心構えで帰郷し、百姓をやるのか。」とたづねられた。私は「学校で学んだ学術を、充分生かして合理的な農業をやり、一般農家の範になりたい。」とある意味模範的な返事をしたところ、先生は足下に《そんなことでは私の同志ではない。（中略）君たちに贈る言葉はこの二つだ「小作人たれ」「農村劇をやれ」と力強く言はれた。

そして甚次郎に「黙って十年間、誰が何と言おうと、実行し続けてくれ。そして十年後に、宮澤が言った事が真理かどうかを批判してくれ。今はこの宮澤を信じて、実行してくれ。」と諭した。

その賢治との一度の出会い、賢治の確信に満ちた言葉が、甚次郎の心を揺さぶり生涯を決定づけた。甚次郎は賢治を人生の恩師と呼び、賢治の訓えを終生の信条とし、百姓として故郷の村で生きて行くことを決意することになる。郷里山形新庄に帰り自ら小作人となり、賢治精神を実践し農村指導者として活動した。

甚次郎は、疲弊していく農村農民の生活を守るために、最上共働村塾の開設、隣保館の建築、託児所

や共同施設の設置、消費組合の組織化など行った。禁酒や婦人の地位向上にも力を注ぎ、衣類や味噌などの食品の自家生産や缶詰加工など自給自足的農業経営を実践し、農民生活の向上と農村文化・芸術の確立に生涯をかけて取り組むことになる。甚次郎は10年間の生活記録をまとめた『土に叫ぶ』（昭和13年5月23日）及び賢治作品を紹介した『宮澤賢治名作選』を著わした。

昭和8年9月21日に賢治は逝去する。賢治没後も、甚次郎は賢治を生涯の師と仰ぎ宮澤家と交流を続け、講演や南城共働村塾（注：農民道場）のため花巻や盛岡を頻繁に訪問する。昭和11年11月21日、賢治詩碑「雨ニモマケズ詩碑」が建立され、昭和11年11月23日、除幕式があり、その後毎年命日にこの碑の前で賢治祭が催される。昭和13年11月13日、甚次郎は賢治詩碑と賢治の実家を訪ね、詩碑前で賢治と約束した10年間の業績を報告し自著『土に叫ぶ』を捧げた。

甚次郎は、花巻を訪れて僅か5ヶ月後の昭和18年8月4日に急逝（享年35歳）。生前甚次郎は賢治のそばに埋葬されることを望んでいたもので、甚次郎の遺骨は分骨されて賢治詩碑の横に埋められ（分骨式：昭和18年10月）、甚次郎は恩師賢治と共に永眠している（3）。

松田甚次郎と福井規矩三

賢治が亡くなった翌年（昭和9年2月16日）に「第



写真12 宮澤賢治の會（昭和13年11月2日）
福井規矩三（福井規矩男氏の祖父）（前列左より3人目）

1回「宮澤賢治友の會」が東京新宿で開かれた。この會は、草野心平編による『宮澤賢治追悼』の出版記念會でもあり、賢治の弟である宮澤清六や高村光太郎・草野心平など多くの著名人や在京岩手県人が参加した。翌昭和10年4月20日には、「宮澤賢治友の會」は、『宮澤賢治研究 第1号』（草野心平編）という雑誌を発行している。

東京の「第1回宮澤賢治友の會」を最初として、「宮澤賢治の會」「宮澤賢治市民の會」「賢治研究会」「でくのぼう賢治の會」など「賢治を偲ぶ會」が日本各地で発足した。盛岡に於いても、昭和9年6月1日、「宮澤賢治の會（盛岡賢治の會）」（毎月21日続開）が発会した（4）。盛岡の「宮澤賢治の會」の発会の経緯や会員、活動についての詳細は不明である。

前記したように盛岡測候所の福井規矩三所長は賢治と親しくしており、賢治から『春と修羅』を贈られた。福井規矩三所長は「・・・石灰肥料会社の技師の時、温度と肥料との関係調査のため、熱心に測候所に通ったことがあります。・・・私と宮沢さんは、年齢が随分違うのですが、それで非常に親しく御交際したのは、私のやっている仕事のよい理解者であり、また同時にその仕事を通俗的にかけて、村の人々に翻訳してくれる大切な人です。」と述懐している（11）。

賢治が亡くなった（昭和8年9月21日）直後、盛岡測候所を退職（昭和9年5月18日）した福井規矩



写真13 写真裏面の記述
昭和十三年十一月二日午後六時半公会堂多賀に於て
宮澤賢治の會

三は「宮澤賢治の會」の会員になったと思われる。その根拠として福井規矩三は、昭和13年11月2日午後6時半に、公会堂多賀（フランス料理レストラン）で開催された「宮澤賢治の會」に出席している。この会には松田甚次郎の姿は見られない。写真の背景には賢治の詩「雨ニモマケズ」の一部が見える。福井規矩三が手にしている本は、島地大等編著の『漢和対照妙法蓮華經』（大正3年8月28日、明治書院発行）である。恐らくこの時には「法華經」について勉強していたのであろう（写真12・13）。

ところで賢治が福井規矩三所長に贈呈した『春と修羅』の見返しを見ると、賢治のサインはなく「昭

和十三年十一月十五日 土に叫ぶ 甚次郎記」のサインがある（写真14）。

先生の永劫の業のスケッチであるといふことを信ずる私の十年の行によつて證明することが出来るのだ
昭和13年11月15日 土に叫ぶ 甚次郎記

福井規矩三と甚次郎が直接会ったとの記録は見当たらない。甚次郎の自筆のサインがあるということは、どこかで直接会っていることは間違いない。福井規矩三はどこで甚次郎に出合いサインをもらったのか。疑問が残る。

既に述べたが、甚次郎は宮澤賢治の影響を受けて自ら小作人となり農業指導や村おこしに尽力した人物であり、その活動は多くの人々に影響を与えた。更に10年の活動を記した著作『土に叫ぶ』（昭和13年5月23日）は瞬く間にベストセラーとなり、松田甚次郎の名前は全国に知れ渡った。花巻や盛岡にもしばしば訪れている。恐らく福井規矩三も有名になった甚次郎の名前や業績についてよく知っていたと思われる。

甚次郎は「宮澤先生の墓に詣でて」（3）で、「（昭和十三年）十一月十三日夜行列車で山形から花巻に向かい、黎明の六時半に花巻駅に着いた」と述べており、「今は亡き先生の碑前にて拙著『土に叫ぶ』の報告をなし」と記されている。

ここで昭和13年11月13日～15日までの甚次郎の足跡について調べてみた（30）。

*昭和13年11月13日：賢治詩碑と賢治の実家を訪ねる。

午前7時頃、甚次郎は吉田コトと佐藤しまを伴い、賢治詩碑前で10年間の業績を報告し自著『土に叫ぶ』を捧げた。その後賢治の実家を訪れて仏壇に礼拝し両親等に挨拶した。午前11時花城高等小学校で「賢治の会」主催の賢治先生を偲ぶ会で講演。午後の座談会には、学校の教員・農村青年・町の有力者・宮澤先生の教師・花巻農学校の卒業生など70余名が参加した。

*昭和13年11月14日：午前中六原青年道場を見学・講演する。

六原青年道場は、昭和7年胆沢郡相去村六原（現金ヶ崎町六原）に創設された修練道場。

*昭和13年11月14日：午後母校盛岡高農を訪問する（30）。

甚次郎は母校の学生400名と先生方に12年間の生活と賢治について講演する。

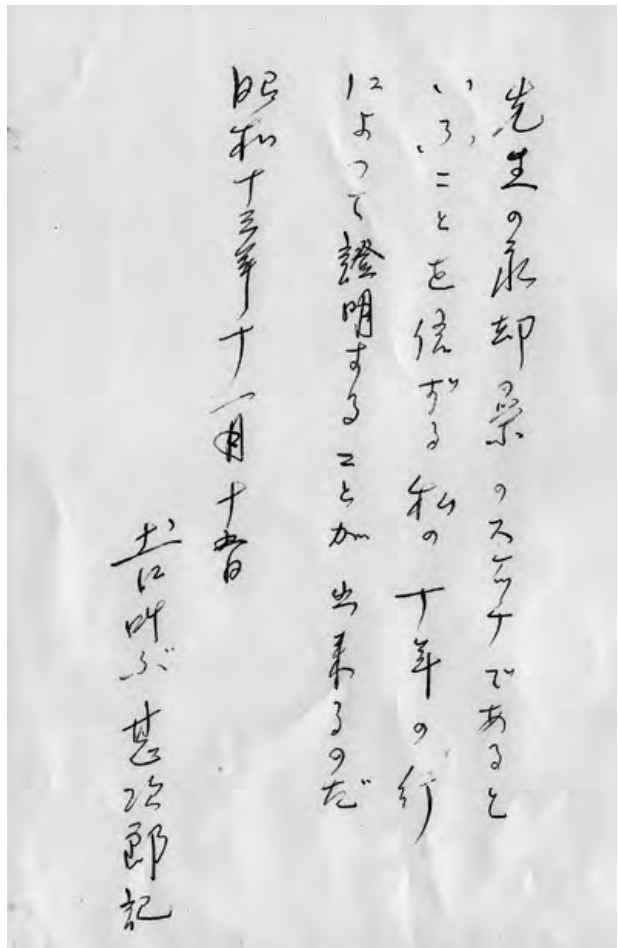


写真14 『春と修羅』の見返しにある松田甚次郎のサイン

・松田甚次郎の動静 A

「松田甚次郎君（昭二）：昭和二年農学別科を卒へ直ちに山形県最上郡稲舟村に帰農せられ爾來十有余年間村更生のため死闘を続けられしに其の努力酬いられ実蹟顕著なるものあり今や日本農林の松田として社会の注目する處となれるは寔に御同慶の至りに不堪る所であります。（略）多忙の中に『愛郷愛土 土に叫ぶ』の書を公にされ羽田書店及び岩波書店より発行定価一円八十銭するに至れるは亦吾々の多謝する處にして本書は政治家は勿論総ゆる階級の人士に学生に農村問題の核心を把握せしめ農業の何たるかを感じせしむるに適切無比とさへ絶讃を得られ居らるは亦同君の誉とも称すべきものならん」

・母校に於ける松田氏講演

『土に叫ぶ』の著者本校別科昭和二年卒業生松田甚次郎氏は十一月十四日午後一時より第一講堂（注：現農業教育資料館2階）に於て農民生活の体験に就て約二時間半に亘り講演された。

・松田甚次郎の動静B

「松田甚次郎君（昭二）：前号に於て真に農村を愛する君の努力が漸く世に認められたるを祝し一段の努力を祈つておきたる所十一月十四日君を今日あらしめたる恩師宮澤賢治先生（大正七年農学二部出身物故会員）の墓参のため花巻に到来されたるを期会に母校講堂に於て後進のため第一講堂に於て盛大なる講演会を催さる。二時間余に亘る長時間の血の滲む過去の体験談と宮澤主義に一堂感激の場面を呈す。君の満足は勿論なるも吾等亦慶びを共にし君の努力を冀ふものである。當日農学実科生との座談会、少年刑務所の視察後多賀会館に於て顧問上村閣下を始め母校先生の御賛同を得て同窓会主催晩餐会（注1）を催し引続き、「宮澤賢治の会」を中心に老若男女各方面の人士との座談会（注2）ありて其夜（十五日の）一時半に休み、十五日朝五時みそぎ（冷水浴）の業を終へ詩聖啄木の碑に参り帰郷さる。（略）御健康を祈る、全国農村更生、農民学創造のため御努力を乞」

注1：母校での講演後、甚次郎の母校来校を祝い盛岡で有名な公会堂多賀で同窓会顧問上村閣下（盛岡高農第4代校長 上村勝爾）を迎えて晩餐会が盛大に開催された。

注2：母校主催の晩餐会の後「宮澤賢治の会」主催の座談会があり多くの人（76名）が参加した。参加者は、盛岡高農の先生・教育家・役人・医者・銀行員・大工・洋服屋・鍛冶屋・八百屋・記者・婦人等各種各様の人々である（3）。

* 昭和13年11月15日：玉山村渋民を訪れ帰郷する。

当日早朝の汽車で玉山村渋民の「石川啄木の歌碑」を訪れる。その後花巻に戻り男女中等学校生徒を対象に「賢治の遺徳と聖者」について語り、江刺郡愛宕村に菊地左江治青年を訪ね、即帰郷する。

松田甚次郎自身も「宮澤賢治の会」主催の座談会の様子を『村塾建設の記』に記している（3）。「私のように未熟な者が参つて、盛岡市に於けるインテリが集られて座談会が催されるといふ事は、現代が如何に宮澤先生の様な真理の探究と実現には、自ら身命を惜しまざる行者が必要になつて来たかを物語るに十分なるものであると信ずる。夜は更け十一時半座談会の熱焰盛んなる裡に会場の時間がもう切れ切れになつて閉会された。」

これらの記録で重要なところは、1）昭和13年11月14日松田甚次郎の動静Bの《「宮澤賢治の会」を中心に老若男女各方面の人士との座談会ありて、其

夜一時半に休み、十五日朝五時みそぎ（冷水浴）の業を終へ》及び2）《夜は更け十一時半座談会の熱焰盛んなる裡に会場の時間がもう切れ切れになつて閉会された。》である。

座談会は会場の都合で11時半にお開きになったが、盛会で論談風発、恐らく時計の針が12時を過ぎた翌日15日に入っても有志は残り座談会が続いたと思われる。そのため甚次郎は午前1時半まで起きていたという。

座談会に出席していた福井規矩三は、賢治から貰った『春と修羅』を持参し、座談会が終り日付がかわった頃に甚次郎にサインを求めたのであろう。従つてサインの日付は「昭和13年11月15日」となった。福井規矩三が甚次郎に出会い『春と修羅』にサインを貰ったのは、この機会しかありえない。

謝辞：元盛岡測候所福井規矩三所長のご令孫福井規矩男氏からは、盛岡測候所や福井規矩三に関する写真や文献など多くの資料を寄贈して頂きました。栗原文子氏及び原子内 貢氏には貴重な文献資料を参考にさせて頂きました。盛岡地方気象台の堀川道広台長には、福井規矩三の履歴等についての情報を提供して頂きました。ここに改めて感謝申し上げます。

参考資料

- 1) 岩手日報（大正3年7月26日）
- 2) 岩手日報（大正6年7月28日～8月8日）：風清く砂白き東の海岸へ（一）～（十）（記事九は欠落）
- 3) 村塾建設の記：松田甚次郎、実業之日本社、103-112（昭和16年1月）
- 4) 宮沢賢治・宮沢賢治年譜（宮沢清六編）：佐藤隆房、富山房、249-275（昭和17年9月）
- 5) 測候所と宮澤君：宮澤賢治研究、草野心平編、筑摩書房、236-238（昭和33年8月）
- 6) 図説 盛岡今と昔：吉田義昭編、川口荷札、盛岡市公民館、200（昭和39年8月）
- 7) 「宮古のあゆみ」：宮古市郷土誌編集委員会編（代表：花坂蔵之介）、宮古市役所、9-20/71-84（昭和49年3月）
- 8) 盛岡写真帳 下巻：盛岡市立図書館、杜稜印刷、148（昭和50年1月）
- 9) 写真集 明治大正昭和 宮古「ふるさとの思い出24」：花坂蔵之助編、図書刊行会、30/152（昭和54年2月）

- 10) 陸中の気象100年—宮古気象百年史：宮古測候所、15（昭和58年12月）
- 11) 宮沢賢治：佐藤隆房、富山房、214-215（昭和60年3月）
- 12) 宮沢賢治全集1：宮沢賢治、ちくま文庫、289-302/311/569-577/581（昭和61年2月）
- 13) 宮沢賢治全集2：宮沢賢治、ちくま文庫、319-320（昭和61年4月）
- 14) 宮沢賢治全集4：宮沢賢治、ちくま文庫、339-340（昭和61年7月）
- 15) 宮沢賢治全集6：宮沢賢治、ちくま文庫、227-276（昭和61年5月）
- 16) 宮沢賢治全集9：宮沢賢治、ちくま文庫、52-53（平成7年3月）
- 17) 新校本 宮沢賢治全集9：宮沢賢治、筑摩書房、28（平成7年5月）
- 18) 湾頭の譜：山根英郎、ふるさとエッセー集、文化印刷、57-59/60-66（平成元年11月）
- 19) 盛岡「事始め百話」：吉田義昭、郷土文化研究会、15-17（平成7年5月）
- 20) 宮沢賢治ハンドブック：天沢退二郎編、新書館、89-90（平成8年6月）
- 21) ヤマセと冷害：ト藏建治、成山堂書店、15（平成13年7月）
- 22) 啄木と賢治の酒：藤原隆男・松田十刻、熊谷印刷出版部、245-302（平成16年11月）
- 23) 今日の賢治先生—ミヤザワ賢治37年の生涯—：佐藤 司、永代印刷出版部、319-320（平成20年1月）
- 24) 三五 縄文の風「賢治と測候所」：盛岡と賢治、牧野立雄、賢治と盛岡刊行委員会、228-232（平成21年8月）
- 25) 宮沢賢治の浄土ヶ浜—岡田家に宿泊、白亜の岩礁、エルミタージュ美術館—：栗原文子、駒澤大学心理臨床研究 第15号、16-21（平成28年）
- 26) 賢治の浄土ヶ浜フィールドワーク—岡田家に宿泊、短歌ら、遠野へ100キロメートル—：栗原文子、賢治研究 第132号、1-11（平成29年7月）
- 27) 檜の木大学士の野宿・野宿第三夜—賢治の海岸、〔蛸の浜〕と〔浄土ヶ浜〕—：栗原文子、賢治研究 第137号、54-63（平成31年）
- 28) 本統の賢治と本当の露：鈴木 守、25-68/51-90（平成31年4月）
- 29) 北水会報 第142号（令和4年1月）
- 30) 北水会報 第144号（令和5年1月）
- 31) 宮沢賢治が 何故？花巻町有志の東海岸視察団に参加したのか？：原子内 貢、私信（令和6年）
- 32) <https://kotobank.jp/word/常寂光土-79300>
- 33) 別冊太陽 宮沢賢治 銀河鉄道の夜：平凡社、26（昭和60年6月）



岩手軽便鉄道（昭和18年）（33）